

# Marine Turtler

マリンタートラー 第3号

特定非営利活動法人 日本ウミガメ協議会 機関誌

## もくじ

### マリンタートラー列伝

亀崎 直樹…2

### 日本ウミガメ会議の感想

矢野 由紀…5

### 沖縄美ら海水族館オープン

照屋 秀司…6

### 「LINK WITH LOVE」

船越 礼子…8

### ウミガメ基礎講座3

松沢 隆将…10

### オサガメ類末記

水野 康次郎…12

事務局からのお知らせ…14

## マリントートル列伝

マリントートルも早いもので3号になります。会長の原稿をと求められても、ここのところ愚痴っぽいので、どこへ書いた原稿も爽やかに著しく欠ける状況です。そこで、今回の号からしばらく、これまで私が会ってきたマリントートルを何人か紹介していきたいと思えます。皆さんの親睦のお役にたてばという気もあります。何分、主観に満ちた紹介なので、事実と相違した部分や批判を受けることがあるかもしれませんが、お許してください。

この類の仕事としたら、かつて、日本で行われたウミガメに関する調査・研究をまとめたこともありましたが(亀崎・松井、1997)、その時、紹介できたのは何らかの印刷物を残しておられるかたしか紹介できませんでした。しかし、何も書いてなくてもこの世にはウミガメに関わる人達、すなわち、マリントートルはたくさん存在しており、そのような方々の活動というか行動、さらにはお言葉の記録をここに残すことも重要だと考える次第です。ただし、ここでお許しいただきたいのは、どうしても知己ちきの深い人は詳しく、浅い人はあまり詳しくなくなってしまうことです。また、前述したように私の主観による記述なので、その方の人間性の断片のみの紹介

に留まり、決してその本人を正確に紹介していないこともあるかと思うのです。その時は、どしどし読者のご指摘を受け、より正確度の高い記録を皆さんと共同して仕上げていきたいと思えます。

## 沖縄編その1

沖縄のマリントートルは多い。まず最初に紹介したいのは、宮古島の根間タケさん。1998年頃、私は宮古島城辺町教育委員会で町が委嘱した調査員である根間タケの調査票を手にし、衝撃を受けた。「今夜は月があまりに綺麗なので、お父さんにカメを見に行こう、と誘ったが、お父さんは泡盛を飲んでピータレテ寝ていた。そこで、一人で浜に出ることにした……。」このような味わいのある報告書を見たことがなかった私は、一度でいいから根間タケさんに会いたいと思った。宮古島にはこれまた佐土山安公さんというすごい人がいる。「宮古島の神と森を守る会」という会を実質的にとりしきり、宮古島からどんどん消えうせようとしている御願やそれに関わる風俗を保存しようとしておられる方で、城辺でウミガメの調査もされていた。氏のはからいで根間タケさんに会うことになった。場所は夜の

吉野海岸、いわゆる沖縄でビーチパーティーである。

そもそも多くのマリントートルはビーチパーティーを敵視する。カメが産卵する砂浜で宴会をするわけだから、確かにけしからん話である。しかし、佐土山安公氏は宮古に行けばビーチパーティーに誘ってくれる。それがたまらなく快感であった。一言でいうなら、とにかく暗い、暗いビーチパーティーなのである。陽があるうちにすべて準備をし、浜の隅っこで置き火を囲んで島酒を飲むのである。初めて会った根間タケさんは砂の上に正座をされて私に正対されたが、とにかく顔がみたくても

見えない。あの<sup>うざ</sup>麗しい報告書を書いたのはどんなオバーなのか見てみたいのだが、真っ暗で見えない。結局、その夜はオバーの顔を拝まずに帰ったのだが、実に爽やかな気持ちで宿に帰ったのだった。

オバーは夜浜に下りるのは楽しいと言った。宮古の周囲は高い崖になっているところが多い。オバーの住んでいる保良(ホラ)の集落から吉野の浜に下りるときも崖のジグザグ状になった坂道をおりなければならぬ。オバーがその道を降りるとき、道端にいる螢や蛙が「ティンク、ティンク……」と唄ってくれるという。残念ながら、オジーは他界されたが、根間のオバーは今年も



吉野の浜に虫たちと唱いながら降りていくのだろう。

宮古といえば、仲原龍盛氏(故人)を忘れるわけには行かない。私が氏のもとを訪れたのは1987年のことである。仲盛氏は宮古で唯一生き残っているウミガメの剥製作りをしている人だった。氏は暖かく私を迎え入れてくれて、色々、宮古のカメの話聞かせてくれた。ただ、産卵の話となると、今から思えば平良に住んでおられるためか、あまりご存知無く、私が50ccのレンタルバイクでいろんな海岸を回り、採取してきた卵を見せると驚いて、そして喜んでくれた。そして、ご飯をご馳走になるわけだが、このご飯がすごかった。とにかく、どんぶり鉢に山盛りのカツオの刺身を出して、食べるというのである。その間、常に「宮古のカツオはうまいだろ」といい、何故か私が八重山に住んでいたという、「八重山じゃ、こんなに沢山の刺身をださんだろ。」と自慢気に言うのである。私は死ぬ思いで刺身を食べ、山盛りの刺身を半分位食べると、また「八重山じゃ、こんなにださんだろ」と言って、低くなった刺身の山を再び元の山に戻すのであった。私は、仲原氏の元から帰る時、決して快適でない満腹感と八重山と宮古の深い溝を感じながら帰ったの

だった。

仲原氏の自慢話はそれだけでなかった。ご自分で作られたタイマイの剥製は世界一と豪語し、甲長30センチ代のタイマイの剥製を畳に置いて、その上に片足で立つのである。ところが確かにそのタイマイはユラユラする仲原氏の全体重をかけても壊れることはなかったのである。そして、職を失って貧乏のどん底にあった私だが、気づいたときにはそのタイマイの剥製を買うことになっていたのであった。ウミガメの剥製を私が買ったのはこれが最初で最後である。この記念すべきタイマイの剥製は現在、屋久島うみがめ館に展示してある。

ううむ。この調子なら、この列伝で何年間かはしのげそうである。(つづく)

会長 亀崎直樹

## 日本ウミガメ会議の感想

去年の夏からボランティアとして、日本ウミガメ協議会に関わるようになった私にとっては、初めての日本ウミガメ会議の参加となりました。

今回で13回目を迎えたこの会議は、徳島県阿南市で開催されました。「毎年秋の深まる頃、日本各地からウミガメに関わる方々が集まり、情報の交換をし、交流を深めることを目的とした会議」と聞いていましたが、「会議」という言葉から少し堅いイメージを抱いていました。

しかし、参加してみると様々な方との出会い、興味深い講演など、色々と刺激の多い3日間となりました。この会議では、保護や利用といった主観や思想をメインテーマにあげず、ウミガメのことを淡々と話し合うことをモットーとしています。そうすることによって、ウミガメが抱えている問題を鮮明にしていくことが期待されています。

会議のメインとも言われる夜の懇親会では、色々な立場や世代の方と話をすることができます。それは重要であり、最大の楽しみとされています。ウミガメのことだけでなく、環境問題のこと等を語り合う中で、カメに対する想い、自然を想う気持ちは皆一緒だと感じました。

今の世の中は、欲しいモノは何でも手に入る社会です。では、内面的な豊かさとは？例えば、何かを愛すること、優しさ、自然に触れ合うことだと私は思います。とても

寒い日のこと、ある人が言いました。「道端に鳥が何匹も死んでいた。きっと寒かったんだろうね。」と。その鳥が、寒さに耐えられなかったのかどうかは知りませんが、人も他の動物も同じ地球で、それぞれ厳しさの中で生活しています。決して自分本位であっては駄目だと思います。周りで起きている事を知ろうとし、出来る事をする、やはり一番大切なことではないでしょうか。

さて、会議で3日間を共に過ごした人々はもちろん普段はそれぞれの生活を送っています。この会議で集まり、お疲れさまでしたと1年を振り返り、ここで日本ウミガメ協議会の年度は代わります。出会った人と「また来年も会えるよね」と言って別れたとき、妙に嬉しい気持ちになったのを覚えています。

次回、第14回日本ウミガメ会議が、そしてこの先ずっと無事に開催されることを願っています。

事務局ボランティア 矢野由紀



## 沖縄美ら海水族館オープン

沖縄那覇空港から北へ車で約2時間ほど北上すると通称「やんばる一山原」と呼ばれている沖縄本島北部に、国営沖縄記念公園があります。ここは、1975年沖縄国際海洋博覧会が行われた会場を整備し、1979年から同公園が開園して現在に至っています。この公園にある水族館が、延べ1900万人あまりの入館を最後に昨年8月31日に閉館し、それにかわって同年11月に旧水族館に隣接して「沖縄海水族館」としてオープンしました。

美ら(ちゅら)とは、沖縄の方言で「きれい」「美しい」という意味があり、沖縄の美しい海に生息する海生動物を、7500トンもある「黒潮の海」大水槽を始め自然光をふんだんに取り入れた、屋根のないサンゴ水槽や熱帯魚の水槽など大小70個の水槽で沖縄の魚達を紹介していきます。ちなみに容量では世界1

位の水槽は、アメリカのディズニーワールドにあるリビングシーの20000トンの水槽ですが、世界に類を見ないジンベエザメ、マンタの複数飼育など内容的には「黒潮の海」が断突トップです。

美ら海水族館の目玉は、このジンベエザメ3尾とオニイトマキエイ(マンタ)4尾の複数飼育です。複数ということはもちろんペアで飼育しており、将来繁殖を目指しています。マンタはすでに求愛らしき行動も観察されていますが、ジンベエザメはまだ子供で近い将来期待できます。子供のジンベエザメとはいえ全長7m近くあり、そのジンベエザメが、自然界と同じように水面に垂直になって立ち泳ぎしながら食事する様子は圧巻です。その他にも、魚を下から見上げるアクアルームやゆっくりお茶をしながら観ることができる喫茶室



も人気があります。

ところで、ウミガメをこよなく愛する方々には、気になるところですがウミガメはこの館内ではなく、同公園内にある「ウミガメ館」という施設で観ることができま



全国には70館近い水族館あり、ほとんどの水族館でウミガメを展示していますが、ウミガメだけをガラス越しに観せる施設を持っている水族館は、当館を始め数館しかありません。もちろんこれらの水族館では、産卵する砂浜を設けてあり、当館でもその他に大小4つのプールを備えています。当ウミガメ館では、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ、クロウミガメ4種35頭の世界海ガメを飼育しており、毎年アカウミガメとアオウミガメが産卵しています。ふ化した子ガメは一部を1年間飼育してこれまで約1500頭標識放流を行いました。その結果1985年に放流した1才のアカウミガメが、2

年4ヶ月後に米国西海岸のカリフォルニア沖で再捕され、また1988年に放流された1才のアカウミガメが6年後にメキシコ西海岸沖で再捕されるなど、これまで日本で生まれたアカウミガメが大平洋を横断すると推測されていたことを立証しました。

水族館には、「教育」「レクリエーション」「自然保護」「研究」という4つの役割があり、その中で自然保護に関する活動も重要な役割です。特に稀小動物の紹介やその動物の置かれている環境を入館者へ知らせる努力を怠ってはいけません。

前述したようにウミガメは、多くの水族館で展示飼育していますがそのウミガメの置かれている環境を紹介している園館はまだ少ないように思います。当館ではウミガメの生態だけではなく、混獲やストランディングしたウミガメを紹介し自然保護や環境問題も解説しています。

美ら海水族館4階のエントランスから見渡す東シナ海と白い砂浜は実に眼を見張る物がありますが、海中や砂浜が汚され壊されていく事に私達水族館屋は警告していく義務があると思っています。

沖縄美ら海水族館

飼育展示課 照屋秀司

## LINK WITH LOVE

マリントーターを御覧の皆様こんにちは。

私は、自然とサーファーを繋げる活動を昨年の春から開始している「LINK WITH LOVE」代表、船越れいこです。

突然ですが、みなさんはサーファーをどのように捉えていらっしゃるのでしょうか？きっと様々な印象をお持ちだと思います。でもおそらく多くの方が、海でも街でもひどいマナー、派手でちゃらちゃらしている、という印象をお持ちの方が多いと思います。確かにそうかも知れませんが、マナーのないサーファー、格好だけでサーフィンをしている子、たくさんいます。でも、ひとつ言えることは、常識がないに関わらず、彼ら彼女らは、自然に思う存分触れているという点です。私は自分を含め、まずは自然に自らが触れることから自然の尊さを肌で感じることができると信じています。ブラウン管でも写真でもない実際の自然に触れ、感じるからこそ、自然を守る第一歩だと思っています。そんな彼らは少しの刺激で芽生える素晴らしい価値観をきっと持っているのだと思います。

私はずっとサーフィンをしています。サーフィンというスポーツ自体は当然大好きですが、なによりも海に入る瞬間がもうたまらなく好きで、かれこれ気が付けば10年ほどたってしまいました。自分をゆっくり見つめることができない日常の流れの中で、海に入る瞬間は、自分対自分でいれる唯一の時間であり、自然の大きさに包まれることで、自分がとても小さく思えます。その感覚が、週末また私を海に向かわせているようです。



今回このマリントーターに原稿を書かせていただける機会をいただいたのも、LINK WITH LOVEを立ち上げたのも、

自然の大切さを感じることができ、すべて自分がサーファーだったという事から始まっています。

今なんでもある世の中で、「豊かさ」を履き違えた情報が右往左往する中、本当の豊かさを判断する基準が狂ってきています。そんな中これからこの日本を担う世代の子たちに少しでも本当の豊かさの判断ができる価値観をもてるきっかけを作ることがLINK WITH LOVE

の一番の目標です。

今おきている自然環境の問題をそんな世代の子達に、いかに解りやすく噛み砕き提供できるか？それには彼らの興味のある音楽、食、アート、洋服、などと自然環境の問題提起をうまく融合させ、提案し続けたいと思っています。その活動の一環として、今年の春から年々4回、若い世代の子たちにむけてnatureとcultureを融合させたフリーペーパー(無料冊子)を作成し、全国規模で配付することにしました(今年4月下旬、初刊創刊予定)。内容は今おきている自然環境問題を分かりやすく写真をメインに表現します。その他にもたくさんの情報をやわらかく提案することでもまずは読者に知ってもらうこと、興味をもってもらうこと、そこから否定でも肯定でもとにかく意義をもってもらうこと、それを目的とした冊子です。

是非皆様のお住まいの街で見かけたら是非目を通していただければと思います。そして冊子の内容や活動にご意見御感想をいただければうれしいです。是非お気軽にご連絡ください。

自然と生きていくということは、人と人、自然と人、のあたたか

いリンクが繋がって成り立ちます。私たちも、皆様からの声というあたたかいリンクで、多くの人に情報をなげかけ続け、さらなる大きなリンクを作っていきたいと思っています。皆様のリンクをどうか私たちに貸して下さい。宜しくお願いします。

LINK WITH LOVE 代表 船越れいこ

ホームページアドレス

<http://www.geocities.co.jp/NatureLand/8478/>



「飾りじゃないのよ」

ウミガメの産卵シーズンになると、事務局には各地のメディアから様々な問い合わせがよせられます。よくある質問の中に、「ウミガメの涙はいわゆる涙ではないと聞きますが、どういうことですか？」というものがあります。確かに砂浜に上陸したウミガメは目をうるませています。お産の苦しさから泣いているようにも見え、なんとも同情を誘うものです。

以前、子供達を引率して南部の千里浜にウミガメの産卵を見学にきていた小学校の先生は、こんな説明をしていました。

「ウミガメは普段、海に暮らしているから上陸すると目が乾くんだ？だから涙を流して目を保護しているんだぞ」

危うく納得しそうになりますが、だとしたら涙を流すのは陸の上だけのはずですが、しかし、実は海の中でも流します。水族館でウミガメを観察する機会があったらよく見て下さい。目から鼻水のような粘液を引きずっていますから。では、目の保護のためではないとしたら、一体、何のためなのでしょう？多くの方は既にご存じだと思いますが、この涙の

ような液体の正体は、塩類腺という器官から出てくる塩水で、体の中の余分な塩分が濾しだされたものなのです。

ウミガメが餌にしている無脊椎動物や海草、海藻は、海水と同様にウミガメの体液の約3倍の塩分濃度があります。だからウミガメは餌と一緒に余計な塩分まで取ってしまいます。塩分の取りすぎがよくないのはヒトもウミガメも同じ。脊椎動物の体の中では塩分濃度が一定に保たれていて、濃度が高くなりすぎたり低くなりすぎたりすると体を構成している細胞が壊れてしまうのです。そこで、この余計な塩分を排泄しなければなりません。

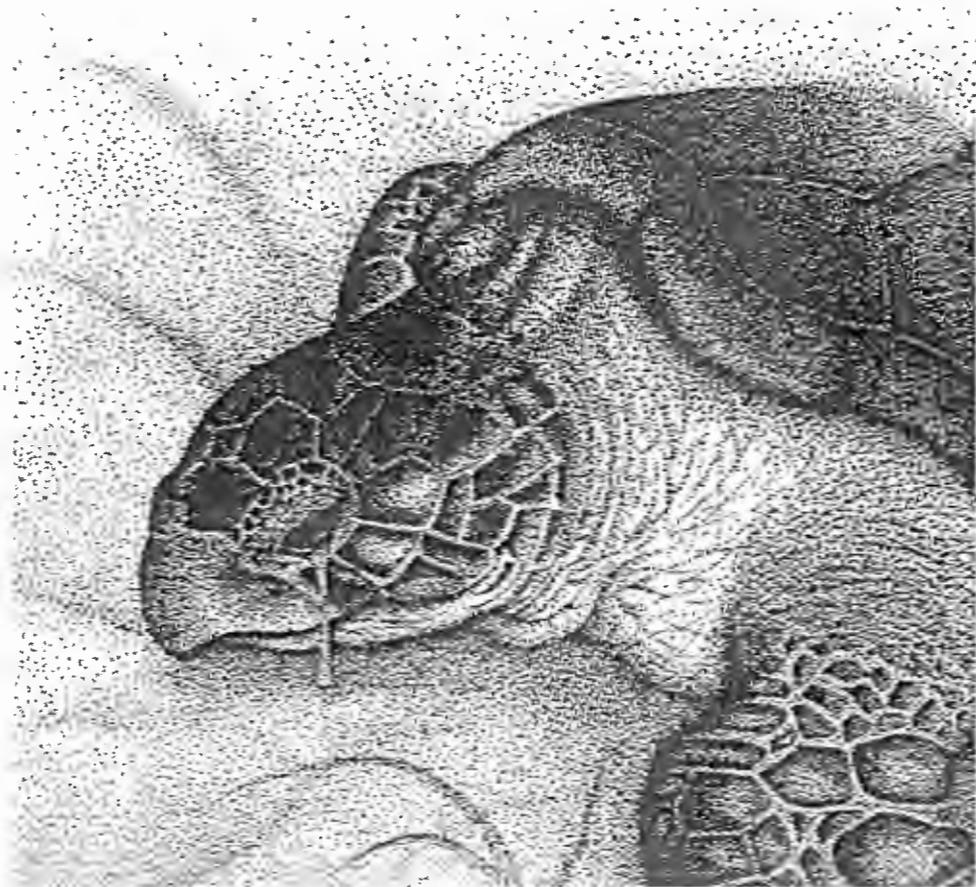
排泄というと、腎臓を思い出します。しかし腎臓から塩分を排泄するには大量の真水が必要です。陸に暮らしている私たちとは違って、海で暮らす動物たちにとって真水を獲得するのは至難の業です。海産哺乳類の場合、脂肪や蛋白質の代謝によって体内で大量の水を作ることができ、さらに発達した腎臓を持つのでこれでもよいのですが、代謝が低く、真水を獲得できないウミガメでは不可能です。そこで、ウミガメはこの塩分を濾し出すための

特殊な器官を発達させました。それが塩類腺です。

この塩類腺、なんと海水の約2倍の濃さの塩水を排泄することができます。ウミガメの塩類腺は涙腺から派生したもので、目の後ろ側に位置しています。頭蓋骨の中でかなり大きな空間を占めていて、オサガメの場合は脳の約2倍もの大きさになります。塩類腺の分泌管の開口部は目尻にあるために、その分泌物が涙のように見えるわけです。他にも塩類腺が

備わっている動物がありますが、別の分泌腺から派生しており、ウミヘビやワニの場合には涙ではなくてよだれに、海鳥の場合には鼻水になってしまいます。とある国の宰相のに言わせると、「涙は女性の最大の武器」だそうです。もしウミガメがよだれや鼻水を垂らしながら産卵したなら、これほどまでに愛されなかったのではないのでしょうか。自然は時々粋な計らいをするものです。

松沢慶将 主任研究員



昨年、日本で初めてオサガメの上陸・産卵が確認されました。その当時の様子をご報告します。

2002年6月28日

夕方頃、私が沖永良部島の調査で浜を歩いていたところ、知人から電話が入りました。その内容が「オサガメが昼間あがって産卵していったらしいよー」

えっ、オサガメ？アオウミガメの大きいのではなくて？と疑ってしまいました。しかも昼に産卵したと言うではないですか。半信半疑のまま、何度も聞き返しましたがオサガメの一点張りです。しかも産卵があったという場所は私が住んでいる所と目と鼻の先です。しかし、実際に見た人とは連絡が取れておらず、とりあえず連絡が来るのを待つことにしました。

6月30日

沖永良部島から与論島に船で移動中、ようやく目撃者から連絡が入りました。

「間違い有りません。背中に何本か線があり、とても大きな個体です」

話を聞く限りではオサガメのような気がしないわけでもありません。足跡を奄美大島の興克樹氏(奄美海洋展示館)に確認して頂くことにしました。

興氏が確認した結果、足跡幅は

2m近いというのです。船から落ちそうになりました。2mといえはボブ・サップの身長に相当します。こんな大きな足跡はオサガメの他に考えられません。

動揺を抑えながら大阪の協議会事務局へ連絡しました。事務局も驚き、通事氏が急遽奄美に飛ぶことになりました。私も与論滞在を1日で切り上げ奄美に向かうことにしました。

7月1日

台風が近づいてきたこともあり波風が強くなっていましたが、船で奄美に戻ることができました。

夜、駆けつけた通事氏と合流しました。

7月2日

通事氏と情報収集の開始です。いくら話を聞いても、写真を見るまでは、心のどこかに巨大なアオウミガメかも知れないという邪念がまだありましたが、写真を見せられた瞬間、その邪念は吹き飛びました。

産卵跡は台風の影響で消えかかっており、数日遅ければすべて流失してしまうところでした。

数日が経過し、細かい情報や写真を得ることができ、通事氏も大阪に帰りました。これでオサガメの上陸・産卵調査が終わりました。

しかし、もう一度産卵が行われる可能性も否定できません。気を付けながら大島周辺を調査していました。

7月12日

オサガメの産卵間隔とされている10日目も過ぎ13日目まで上がりませんでした。私は翌日の柔道大会に出場するため、船に乗り徳之島へ向かいました。

昼頃、大きな足跡があると集落の方から連絡がありました。その時もまた私は船の上、一回目の産卵から14日もたっています。どうあがいても帰れません。またまた興氏に確認して頂いたところ、足跡幅1.9m、卵の大きさからも間違いのないとのこと。会長の顔が目に見え、今度こそ本当に船から落ちそうになりました…。事務局からは、フェリーから飛びおりて泳いで帰れとか言われそうな感じでした。

7月13日

大会も終わり、すぐ船に乗り奄美へ戻って来ました。

7月14日

台風の影響で風は強く、雲は走り、波も高く近くまで引き波がくるような状態でした。その中で産卵巣の調査です。しかもオサガメ

の産卵巣は深く、掘っても掘ってもなかなか出てきませんでした。興氏の手助けもあり、2回目の調査も無事終わりました。

2度あることは3度ある。3度目は気合を入れ、興氏や地元の人たち、鹿児島大学の学生も呼び、万全の体制で毎晩調査しました。

結局それ以降は上がらず、最後までタイミングをはずしてばかりのオサガメでした。

今回はオサガメから多くのことを教えてもらったような気がします。そして情報を下さった方や地元で協力して下さった方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

調査員 水野康次郎



撮影:沖 充弘さん

# 事務局からのお知らせ

## 日本ウミガメ協議会会計報告

(平成14年度)

平成13年11月1日より平成14年10月31日

単位：千円

収入の部	
会費	2,146
助成金・補助金	29,804
事業委託	11,960
ウミガメ会議参加費	2,602
寄付金	1,301
その他	18,730
収入の部計	66,543
支出の部	
自然環境保全事業（調査・研究費）	13,881
小笠原海洋センター運営	24,487
八重山海中公園研究所運営	5,238
ウミガメ会議開催費	3,094
情報提供事業（速報・会報）	102
うみがめニュースレター支援	150
管理費（人件費・事務所経費等）	16,903
支出の部合計	63,855
当期収支差額	2,688
前期繰越収支差額	5,301
次期繰越収支差額	7,989

各費目のうち主なものは、次のとおりです。

助成金・補助金収入	単位：千円
東京都小笠原村	15,320
環境事業団地球環境基金	4,364
日興グリーンインベスターズ	1,000
公益信託経団連	3,500
たばこ産業弘済会	1,120
事業委託収入	
日本べっ甲協会	4,000
東京都小笠原村	2,000

## 《特別企画・100000Hitはだれ?》

ウミガメ協議会のホームページは昨年の4月に大幅改定後、幸いにしてご好評を頂き、3月末日までの閲覧回数が延べ91000Hitを超えました。そこで感謝の意を込めて、トップページのアクセスカウンター100000回目に関覧いただいた方に、記念品を差し上げたいと思います。また、100000回目の閲覧者にお越しいただいた日にちを当てた会員の方にも景品を差し上げたいと思います。

### ① 100000回目に関覧された方

100000になったトップページをプリントアウトして郵送いただくか、該当画像をメールにて事務局までお送りください。

### ② 100000回目の日にち予想

会員の方には、100000回目の閲覧者が出ると思われる日を予想していただき、事務局までお知らせください。突破の日を持って締め切りとさせていただきます。

## 《頒布品のご案内》

ウミガメに関する書籍や、オリジナルバッチ携帯ストラップ、ポスター、絵葉書などの頒布を行っています。一部の商品については、会員割引もしていますので、ぜひご利用下さい。商品の詳細は、当会のホームページに掲載しているほか、マリンタートラ第2号でもご紹介しています。ご覧下さい。

## 《会員の募集について》

ウミガメ協議会の会員数は、2月末で約800名(団体を含む)となっています。会員の皆様からの会費は貴重な財源となっています。協議会では賛助会員(STSメンバーズ)を常時募集しています。皆様のお近くにウミガメに興味のある方や、海洋環境に関心のある方がおられましたらぜひウミガメ協議会をご紹介下さい。入会案内パンフレットがご入り用でしたら、事無局までご連絡下さい。

## 《年会費納入について(お願い)》

会員の皆様の会員期間は、ご入会の日から1年間となっております。会員期限を経過している方には専用振り込み用紙を同封しておりますので、お早めにお近くの郵便局からお振り込みいただけますようお願い致します。(手数料は無料です)

寄付金をいただいた方々  
(順不同・敬称略・10月末まで)

肥後伸夫、梶原慧太、西田雄祐  
野崎稔、明石南ロータリークラブ  
川道美枝子、柴田種明、内田保  
国友美智、弘中輝、宜野座稔  
亀井陽太郎、植平有治、神尾玉枝  
山崎道義、山田アイ子、佐藤艶子  
三菱商事食料本部有志、井内美砂  
若林六平・博子、陸山純由、村上健  
屋久島観光センター、塚田津恵子  
冨田由美、富士ゼロックス(株)  
富士ゼロックス端数倶楽部、由井互  
神楽坂女声合唱団(小林カツ代)  
小川友正、植松正弘、徳永章二  
川崎公夫、四宮忠則、服部邦雄  
亀崎長生、井上祥夫、宮脇逸朗  
松本憲二郎、GambaNPO匿名3件  
森田和夫、中村幸弘、宮本満次  
JTB名古屋支店

ありがとうございました。

# 編集 後記

はじめまして。今回マリンタートラの編集・デザインを担当  
させて頂きました矢野です。

本文中にも書きましたが、私は去年から大阪事務局のボラン  
ティアとしてお手伝いさせて頂いています。「自然と関わる仕事  
がしたい!」という思いで進む道を見つめ直し、ちょうど転機で  
あった頃、あるめぐり合わせで協議会と出会いました。

ボランティアというと、皆さん調査に行ったりしますが、私は  
調査へ行った事がありません。高校時代に映像デザインの勉強  
をしていたということもあって、主にパソコンでできる仕事を  
しています。もちろん、現状で100%満足なわけではありません  
が、「私にできる事があれば!」という思いで事務局へ足を運んだ  
私にとってはとても嬉しいことです。

このように事務局では、それぞれの得意分野・能力を考慮し  
て、仕事を振り分けています。これが事務局のスタイルと言える  
でしょう。

最後に、次回マリンタートラ第4号をより良い会報誌にしたい  
と思っておりますので是非ご意見、ご感想をお聞かせください。  
お待ちしております。

## ☆マリンタートラ(日本ウミガメ協議会機関紙)☆ 第3号

発行日 2003年4月21日  
発行 日本ウミガメ協議会事務局

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302  
電話:072-864-0335 Fax:072-864-0535  
URL: <http://umigame.org> E-mail: [info@umigame.org](mailto:info@umigame.org)